

岩手水産技術研報第5号

ISSN 1343 - 0114

**BULLETIN OF IWATE PREFECTURAL
FISHERIES TECHNOLOGY CENTER**

No.5 February, 2005

岩手県水産技術センター研究報告

第5号 平成17年2月

岩手県水産技術センター

岩手県釜石市大字平田

IWATE PREFECTURAL FISHERIES TECHNOLOGY CENTER

HEITA, KAMAISHI, IWATE 026-0001, JAPAN

岩手県水産技術センター研究報告

第5号

目 次

- 2004年4～6月の岩手県沖合におけるスケトウダラ *Theragra chalcogramma* の漁獲と資源の特性
..... 後藤 友明 1
- 岩手県沿岸海域におけるムラサキイガいの養殖試験について
..... 小林 俊将・坂本 晋 11
- Alexandrium tamarense* 給餌におけるマガキによる麻痺性貝毒の蓄積および減毒の様相
..... 加賀新之助・関口勝司・佐藤 繁・児玉正昭 17
- 新規養殖業マツカワのマーケティング研究
..... 宮田 勉・石田知子・阿部繁弘 21

2004年4～6月の岩手県沖合におけるスケトウダラ *Theragra chalcogramma* の漁獲と資源の特性

後藤 友明

2004年4～6月にみられたスケトウダラの大量漁獲について、統計データと宮古魚市場における体長組成、および着底トロール調査の結果に基づき漁獲と資源の特性を明らかにした。その結果、スケトウダラの漁獲は4月に増加して5月中旬にピークとなった後6月には収束し、この間の漁獲量は12,173トンに達した。耳石による年齢査定から、この漁獲量の95%は2000年級群であると推定された。着底トロール調査の結果から、岩手県沖合域における現存量は56百万尾、17,104トンと著しく高い資源水準となっており、漁獲物組成と同様に2000年級群が卓越していた。GSIや胃内容物組成の評価、並びに過去の調査結果および海洋環境との比較から、この時期卓越していた2000年級群は、4月頃に沿岸親潮水の卓越によって、産卵場である噴火湾周辺海域から産卵期を過ぎた資源が一時的に拱餌場を求めて移入してきたと考えられる。

岩手水技セ研報, 5, 1～10 (2005)

岩手県沿岸海域におけるムラサキイガイの養殖試験について

小林 俊将・坂本 晋

岩手県沿岸海域でのムラサキイガイ *Mytilus galloprovincialis* の垂下養殖を試みた。Mussel ropeとsocking netの隙間に平均殻長約20mmの稚貝を詰めたものを2002年9月6日に延縄施設に垂下したところ、約1年後の2003年9月2日には約65mmに成長した。このことから、同海域でも本研究で用いた手法により、効率的にムラサキイガイの垂下養殖を行うことが可能であると考えられた。

また、岩手県沿岸海域でのムラサキイガイの軟体部重量比（軟体部重量/全重量）の季節変化を調べたところ、春期～秋期に高く冬期に低かった。このことから、この海域でのムラサキイガイの身入りは春期～秋期に良くなることが示された。

岩手水技セ研報, 5, 11～15 (2005)

Alexandrium tamarense 給餌におけるマガキによる麻痺性貝毒の蓄積および減毒の様相

加賀新之助・関口勝司・佐藤 繁・児玉正昭

予め、8日間個別別に水槽で飼育しておいたマガキに、既知の量の有毒渦鞭毛藻 *Alexandrium tamarense* の培養細胞を8日間にわたって給餌し、その後の10日間は無給餌で飼育した。18日間の試験期間中に、1日おきにマガキを3個体ずつ取り出し、それぞれ個別別にHPLCにより毒量を分析した。また、周囲の飼育海水中に排出された毒を回収し、同様に分析した。給餌期間中、マガキの毒量は給餌日数を重ねても容易に増加せず、本種が毒を蓄積しにくい特徴を示した。またマガキの毒量と飼育海水から回収された毒量との合計は、給餌により供給された毒量より少なく推移した。無給餌移行後、マガキの毒量は徐々に減少したが、マガキの毒量と飼育海水の毒量との合計は減少する傾向は示さず、むしろ徐々に増加しているように思われた。これらの結果は、マガキとその周囲環境水を含む系では、一度系に取り込まれた毒は容易に減少しないことを示唆する。

岩手水技セ研報, 5, 17～20 (2005)

新規養殖業マツカワのマーケティング研究

宮田 勉・石田知子・阿部繁弘

マツカワ養殖業開始当初は順調であったが、名前が市場で浸透していなかったため、販売は苦戦を強いられた。そこで、協議会を結成し、プロモーションを行った。その後売上は上昇したが、未熟な技術・技能によって種々のミスが発生し、生産量は不安定化し、需要も不安定化している。種々の要因によって価格も低下しており、これも大きな課題である。

そこで、本研究は、現状分析をととしてマツカワ・マーケティング戦略を構築することを目的とした。本論で分析した結果、次ぎのことが重要であると考えられた。

生産量を安定化させるために、現在の6経営体からさらなる拡大が必要である。しかし、新規参入には、漁家の資金不足、ギンザケ養殖業の敗北、魚類養殖による環境への負荷問題がある。したがって、インターナル・マーケティングが重要であり、行政及び協議会等が中心となってこれらの問題を解決し、新規参入の増加が促すことが必要である。

価格を上昇させるためには、市場細分化、ブランド化、プロモーション戦略が重要である。市場細分化においては、需要者のベネフィットを追求した細分化が重要である。そして、ブランド・ロイヤルティを構築し、反復購買者を増加させる戦略も重要である。

岩手水技セ研報, 5, 21~33 (2005)

お知らせ

岩手県水産技術センター研究報告第4号(平成16年2月)に掲載されている以下の論文に、次のとおり誤植がありましたので訂正します。

タイトル：岩手県沖合域に生息するキチジ *Sebastolobus macrochir* の年齢, 成長, 成熟および食性
ページ：41ページ

体長-体重関係式

誤： $BW = 1.566 S L^{3.100}$

正： $BW = 1.566 \times 10^{-5} \times S L^{3.100}$

体長-年齢関係式

誤： $S L = 294.3 (1 - e^{-0.229(t+0.408)})$

正： $S L = 294.3 (1 - e^{-0.229(t-0.408)})$